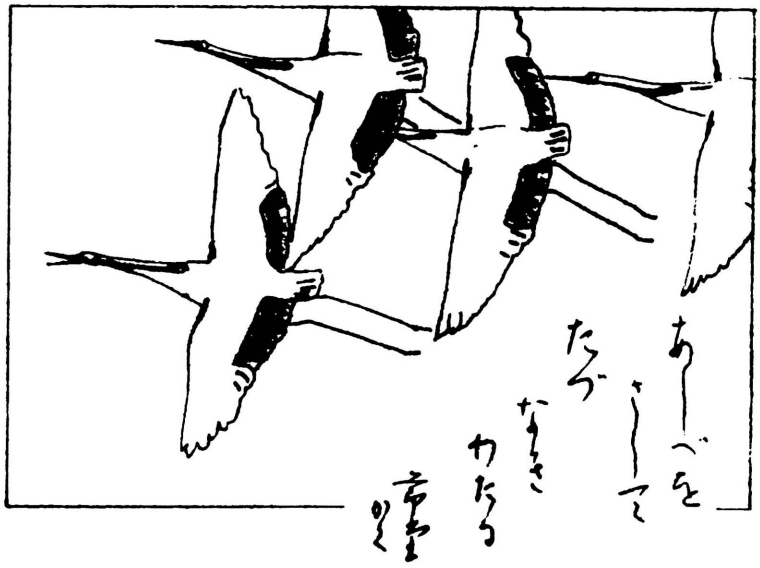
はまゆうと椿貝と
海光るわが故里

鶴沼

昭和六十年一月号
通巻第二十四号



鶴沼を語る会

鶴について

富士　山（たかし）

芽出度き新年を迎えて鶴の話をしてみたいと思います。

万葉集では鶴をたづと読むことは、どなたも御存じのとおりです。万葉集の原文にたづを鶴と正しく書いたものの他に、色々な宛字を用いた場合が仲々多い。私は万葉集四五一六首全部を調べて見た結果、次のようになった。

一、　原文に　鶴　と書いてあるもの　二十二首
二、　原文に多豆となっているもの　十一首
三、　原文に多頭となっているもの　十　首
四、　原文に多都となっているもの　一　首
五、　原文に多津となっているもの　一　首
六、　原文に　鵠　となっているもの　一　首
合　計　四十六　首

これから仮名まじりの現代万葉集と、原文の万葉集を並べて味わってみたいと思います。特に説明を要するようなむつかしいものは一首もない筈です。

一、万葉集で鳥の鶴をたづと読む。用例を二、三あげて見ると、

以下、（原文）は、沢潟久孝氏による

三―二七一

桜田へ　鶴鳴きわたる　年魚市潟　潮干にけらし
さくらだへ　たづなきわたる　あゆちがた　しほひにけらし
鶴鳴き渡る
たづなきわたる

三―三八九

島傳ひ　敏馬の埼を　傍ぎ廻れば　大和恋しく
しまづたい　みぬめのさきを　こぎみれば　やまとにひしく
鶴多に鳴く
たづさはになく

九―一七九一

旅人の　宿りせむ野に　霜降らば　わが子羽ぐくめ
たびひとの　やどりせむのに　しもふらば　わがこはぐくめ
天の鶴群
あまのたづむら

注、旅を客とかいたものは万葉集に相当に
多いが、これは後日の機会にゆずりたい。

二、たづを多豆と書けるもの、二首あげておく。

七―一一六〇

難波潟　潮干に立ちて　見渡せば　淡路の島に
なにはがた　しほひにたちて　みわたせば　あわじのしまに
鶴渡る見ゆ
たづわたるみゆ

一七―四〇一八

みなと風　寒く吹くらし　奈呉の江に　妻喚び交しく
みなとかぜ　さむくふくらし　なごのえに　つまよびかはし
鶴さはに鳴く
たづさわになく

三、たづを多頭と書けるもの、二首あげておく。

六―九一九

若の浦に　潮満ち来れば　潟をなみ　葦辺をさして
わかのうらに　しほみちくれば　かたをなみ　あしべをさして
鶴鳴き渡る
たづなきわたる

二〇―四三九九

海原に　霞たなびき　鶴が音の　悲しき夕は
うなはらに　かすみたなびき　たづがねの　かなしきよひは

國辺し思ほゆ
くにへしおもほゆ

四、たづを多都としたもの一首。

一五―三六二六

鶴が鳴き　葦辺をさして　飛び渡る　あなたづたづ
たづがなき　あしべをさして　とびわたる　あなたづたづ
独りさ寝れば
ひとりさぬれば

五、たづを多津としたもの一首。

一―七一

大和恋ひ　寝の宿らえぬに　情なく　この渚の崎に
やまとこひ　いのねらえぬに　こころなく　このすのさきに

鶴鳴くべしや
たづなくべしや

六、たづに鵠をあてたもの一首

三―二七三の原文に
磯前（いそのさき）　榜手回行者（こぎたみゆけば）　近江海（あうみのうみ）　八十之湊尓（やそのみなとに）
鵠佐波（たづさはに）二鳴（なく）
とあるから、鵠を鶴とみて、佐々木信綱は
昭和二年自著万葉集に、
磯の埼　榜ぎ廻み行けば　近江の海
八十の湊に　鵠多に鳴く
とした。

―――――――○―――――――

私は三〇年ほど前に、藤沢市内の古本屋から、明治二年宮内省発行の万葉集古義全巻そろいのものを買い入れたが、その後、それを藤沢市中央図書館に寄付した。

その古義は、万葉集の原文をそのまま印刷し、詳しい解釈を引きつづきあげるという体裁のものであった。

今、私が最も大切にしているのは、沢潟久孝・佐伯梅友共著の新校万葉集（創元社刊）で、これは原文に平仮名で丁寧によみをつけ、歌一首毎に番号がついている。その番号は、武田祐吉校註の万葉集（上・下）と全く一致している。（鵠にはたづと振仮名がついている。）

1.　そこで私の知りたいことは、平仮名を入れた現代人向きの万葉集を始めて発行した人は誰であろうか。

二、あの原文の各首に番号をつけた人は誰であろうか。

思うに上記の一、二は、ともに万葉集を現代人に読みやすく親しいものにするのが目的であったと思う。

現代人は誰でも鵠と鶴とは全く別個の鳥と知っている（伊藤節堂著会誌十二号参照）万葉集中ただ一首だけ、鵠を鶴の宛字にしたものがある。現代人の感覚としては、これは鶴（たづ）と書くべきものと思う。それが、昭和二年佐々木信綱が、平仮名まじりの現代人向きの万葉集（上・下）を発行したとき、原文

の鵠をそのまま用いてたづとふリがなをつけた。それ以来六十年後の今日まで、殆どの万葉学者が、佐々木のままうけついでいるのは全く残念である。

原文にある鵠は、たまたま鳥へんのついたこの字が原作者の眼にふれたので、それをたづの当字にしたまでのことと思う。いま広辞林始め、その他広く調べたが、鵠→クグイ→白鳥のことと書いてある許りであって、鶴（たづ）をも意味すると書いたものは一つもない。

武田祐吉・久松潜一共著の古語辞典にも、鵠→くぐい→白鳥のこととしか書いてない。然るに武田著の万葉集には、鵠（たづ）とふリがなをつけている。全くおかしい。

過日鵠沼公民館の図書室で、日本古典文学全集中の万葉集（四冊本）を調べたところ、小島憲夫、木下正俊、佐々木昭広、三氏の校注で、

礒の崎漕ぎたみゆけば近江の海八十の湊に鶴（たつ）さはに鳴く

と出ているのを見付けて、涙の出るほどうれしかった。昭和二年以来今日迄、六十余年間も佐々木の誤りをそのまま承けついでいる中に、上記の三氏が断然と正論を掲げたのは、誠にたのもしい。私は他の万葉学者も、小島、木下、佐々木の三氏の説に従われんことを切に希望するものである。

附記

鶴は名詞（鳥）のときはたづと読むが、名詞以外の場合は、そのままつると読む。用例多いが一、二をあげておく、

三―二九七

昼見れど　飽かぬ田児の浦　大王の
命かしこみ　夜見つるかも

（原文）

晝見騰（ひるみれど）　不飽田兒浦（あかぬたごのうら）　大王之（おほきみの）
命（みことかしこみ）　恐　夜見鶴鴨（よるみつるかも）

十一―二四六一

山の端に　さし出づる月の　はつはつに
妹をぞ見つる　恋しきまでに

（原文）

山葉（やまのはを）　追出月（さしいづるつきの）　端端（はつはつに）
妹見鶴（いもをぞみつる）　及戀（こひしきまでに）

（終）

（昭和五九・一一・一三原稿受付）

大橋流書法の祖
大橋重政に関する
年表

伊藤節堂編

1584　天正12・4・9　大橋重保の父重慶長久手に討ち死
　　このとき重保3才
1590　天正18～文禄2　1593　重保京都南禅寺住職以心
　　より禅僧流の書を学ぶ
1603　慶長8・2　徳川家康征夷大将軍となる
1605　〃10・4　秀忠征夷大将軍となる
1617　元和3・3・17　秀忠僧上寺に詣でたとき重保、訴状
　　を捧げて言上、この年　重保召
　　出されて右筆となり、鵠沼に采
　　地五百石を賜る
1618　元和4　大橋重政生まれる、幼名小三郎
　　通称長左衛門
1620　〃6　二男重為生まれる、通称左兵衛
　　初め重信または重澄といった
1623　〃9・7　秀忠退隠家光将軍となる（三代）
1627　寛永4　重政はじめて将軍家光に目見え10才
1631　〃8　重政家光の右筆となる14才
1632　〃9・1・29　秀忠没す54才
1633　〃10　大橋重保病により右筆を辞す
　　剃髪して龍慶と号す

1634	〃 11	重保後嗣長左衛門重政に家を譲る。鵠沼の采地（鵠沼村六百石のうち五百石）を重政に、重保には養老の料として稟米（扶持米）三百俵を賜わる。
1635	〃 12・12晦日	重保には稟米にかえ牛込郷に采邑三十余町を賜う
1636	〃 13・	重保豊島郡穴八幡社に三十六歌仙の額を揮毫して奉納
1639	〃 16・9・18	重政の書道の師松花堂昭乗没56才
1641	〃 18・12	大橋龍慶（重保）豊島郡放生会寺の縁起二巻を撰し子重政これを書く
1645	正保2・2・4	大橋龍慶（重保）没す64才　武州高田南蔵院に葬る
1646	〃 3・8	重政の弟　重為はじめて家光に拝謁、西丸右筆となる。27才、稟米百俵月俸十口を賜る、のち本城右筆となる
1849	慶安2・8・28	地頭大橋重政御朱印を賜り、采地のうち9石余を空乗寺に寄進す
1651	〃 4・4・20	将軍家光没す48才
	4・7	家綱将軍となる（四代）
1656	明暦2・12	重政の弟重為稟米百俵加増され月俸は公収
1657	〃 3・7	重政の長子重好はじめて将軍家綱に拝顔18才、幼名を重吉、新五左衛門と称す
1665	寛文5・9・23	重政寺社領御朱印の労により賞を受く
		この年重政の三男重尚生まれる、幼名千之助、小左衛門または小兵衛と称した
1667	〃 7	重政の長子重好大番となる
	〃 7・5・16	重政日光山における家光の法会にあずかって褒賜に浴す
1668	〃 8	大橋重為の長子重豊生まれる、初め重旨、のち左兵衛を襲名
1669	〃 9・12・21	重政の長子重好稟米二百俵を給され小普請となる

1672 寛文12・6・30 大橋流の粗大橋長左衛門重政病により没す寿55、龍性院殿道樹居士と諡して空乗寺に葬る

1675 延宝3 武鑑に「御祐筆衆大橋左兵衛殿（重為）二百俵麹町三番町に邸」とあり

1679 〃7 旗本布施孫兵衛鵠沼村六百石のうち二百五十石を賜り、残り三百五十石は御料地となり代官支配す（代官は成瀬重治）

〃7・3 重為の子重豊はじめて将軍家綱にお目見

〃7・12 重為月俸十口を加増される

1681 〃9 武艦に「御祐筆衆二百俵十人ふち大橋左衛門（重為）」とあり

1686 貞享3・3 重好さきに大番を辞して小普請となっていたが再び大番となる

〃3・7 重好の弟重尚22才はじめて将軍綱吉にお目見え

〃3・12 重為五十俵加増される

1659 元禄2・10 重為表右筆組頭に昇進

1691 〃4 武鑑に「御祐筆衆二百俵十人ふち（龍慶橋（りゅうけいはし））大橋左衛門（重為）」とあり、三十二人中三番目に名あり

1691 〃4・11・15 重為祐筆を辞して小普請となる

1692 〃5・4・晦日 大橋左衛門重為没す73才　駒込西善寺に葬る

〃5・7 重為の死により子重豊遺跡を継ぐ

〃6・12 大橋重豊右筆となる

〃6・12 重好の弟重尚大番となる29才

1695 〃8 重尚の長子重章生まれる幼名鍋之助通称小五郎

1703 〃16・3 大橋重豊表右筆組頭となる

1704 宝永元・6・晦日 大橋重政三十三回忌にあたり、長子重好　弟重尚とはかり、空乗寺の霊前に墓碑を建て、父母の法名を刻み、常夜灯一対をささげる

1709 〃6・4・21 大橋重豊右筆勤務に越度あり逼塞の処分を受く

〃6・10・8 重豊の処分恩免となる

1710	〃 7	重好の養子重尚大番を辞す
1716～36	享保年中	鵠沼村高六百五石
1718	〃 3・5・20	大橋新五左衛門重好没79才　麻布真性寺に葬る。実子無く弟重尚を養子とした（元禄6年のころか）
1723	〃 8	重豊致仕す、のち子豊安が甲府城の勤番となり重豊も甲府に移る
1725	〃 10・9	大橋重豊が甲府に没す58才、長遠寺町光沢寺に葬る。ここを代々の葬地と定める。右筆は重豊限り
1731	〃 16・8	大橋重尚致仕す
	〃 16・8・20	重尚の子重章家を継ぐ
1734	〃 19・5	大橋重章大番となる
1737	元文2・8	重章大番を辞す
173	〃 3・11・23	大橋小兵衛重尚没74才江戸鮫橋常深寺に葬る以後同家菩提寺とす
1739	〃 4	大橋重章の長子保孝生まれる
1755	宝暦5	大橋流を継承した篠田行休が「大橋流初学当用集」を書し、日本橋宗文堂から上梓、同書に「大橋先生篠田先生手本類目録」を添付す
1758	〃 8	大橋小五郎重章没す64才
	〃 11	長子保孝遺跡を継ぐ
1760	〃 10・7	大橋保孝早逝す23才、保孝の弟重保家を継ぐ、廩米二百俵を受く
1768	明和5・1	重保大番となる
1782	天明2・4	重保新番に転ず
1783	天明3	重保の長子重泰没す21才、娘に婿養子を迎え重勝と名のる
1790	寛政2・7	重為六代豊成駿府勤番となり、駿府へ移る
1795	〃 7・8	重保新番を辞す
1818～1830	文政年中	鵠沼村高六七七石四斗八升九合
1965	昭和40・5・31	大橋重政の墓を藤沢市の文化財として「史跡」に指定した

――　完　――

（文献）

藤沢市文化財調査報告書第三集
平凡社　書道全集第二二巻

（文献）「新日本書道史」平山観月著（昭和四〇・有朋堂）

御家流系図

- 大師流
- 行成流
  - 世尊寺流
    - 尊円流（御家流）（尊円親王流）
      - 尊実
        - 祐助
          - 尊道
            - 尊満
              - 道円
                - 義円
                - 義快
      - 尊応（尊道流）
        - 尊伝
          - 尊鎮流（尊鎮流）
      - 尊朝（尊朝流）
        - 尊純（尊純流）
      - （以下省略）
      - 素眼流
        - 金蓮寺
          - 光悦流
          - 宗真流
      - 勅筆流
        - 後醍醐天皇
          - 後柏原天皇流
          - 三条流
      - 飯尾流
        - 常房
          - 鳥飼流
      - 宗鑑流
        - 山崎
      - 伝内流
        - 建部
          - 大橋流
            - 重政
      - 龍山流
        - 近衛
      - 道澄流
        - 昭高院
      - 近衛流
        - 信伊
      - 後陽成天皇流
        - 於通流
          - 小野

（参考）「国語国文学図解大事典　上」

大橋氏略系

出自―河内国

末尾の文献に基づき作図

- 大橋重慶　天正十二没
  - 重保　右筆　長左衛門　号龍慶　天正十生
    - 重政　右筆　長左衛門　元和四生　寛文十二没
      - 重好　小普請　寛文十七生　亨保三没
        - 重尚　大番　寛文五生　元文三没
          - 重章　大番　元禄八生　宝暦八没
            - 保孝　大番　元文四生　宝暦十没
              - 重保　大番
                - 重秦　天明三没
                - 女
            - 次男　重保　長男保孝の養子となる
      - 次男　白英　寿松院住職
      - 三男　重尚　長男重好の養子となる
      - 長女　高木氏に嫁す
      - 次女　桜井氏に嫁す
    - 重為　右　左兵衛　元和六生　元禄五没
      - 重政　右筆　寛文八生　享保十没
        - 豊安　甲府勤番
          - 茂休　甲府勤番
            - 茂時　甲府勤番
              - 豊成　駿府勤番
                - 豊章　駿府勤番

文献　「藤沢市文化財調査報告第三集」
平凡社「書道全集」第二巻

大橋氏略系

（出目）文徳天皇河内源氏―坂戸康季の後裔―大橋重治（佐兵衛尉 大永5生才 永禄9没41）

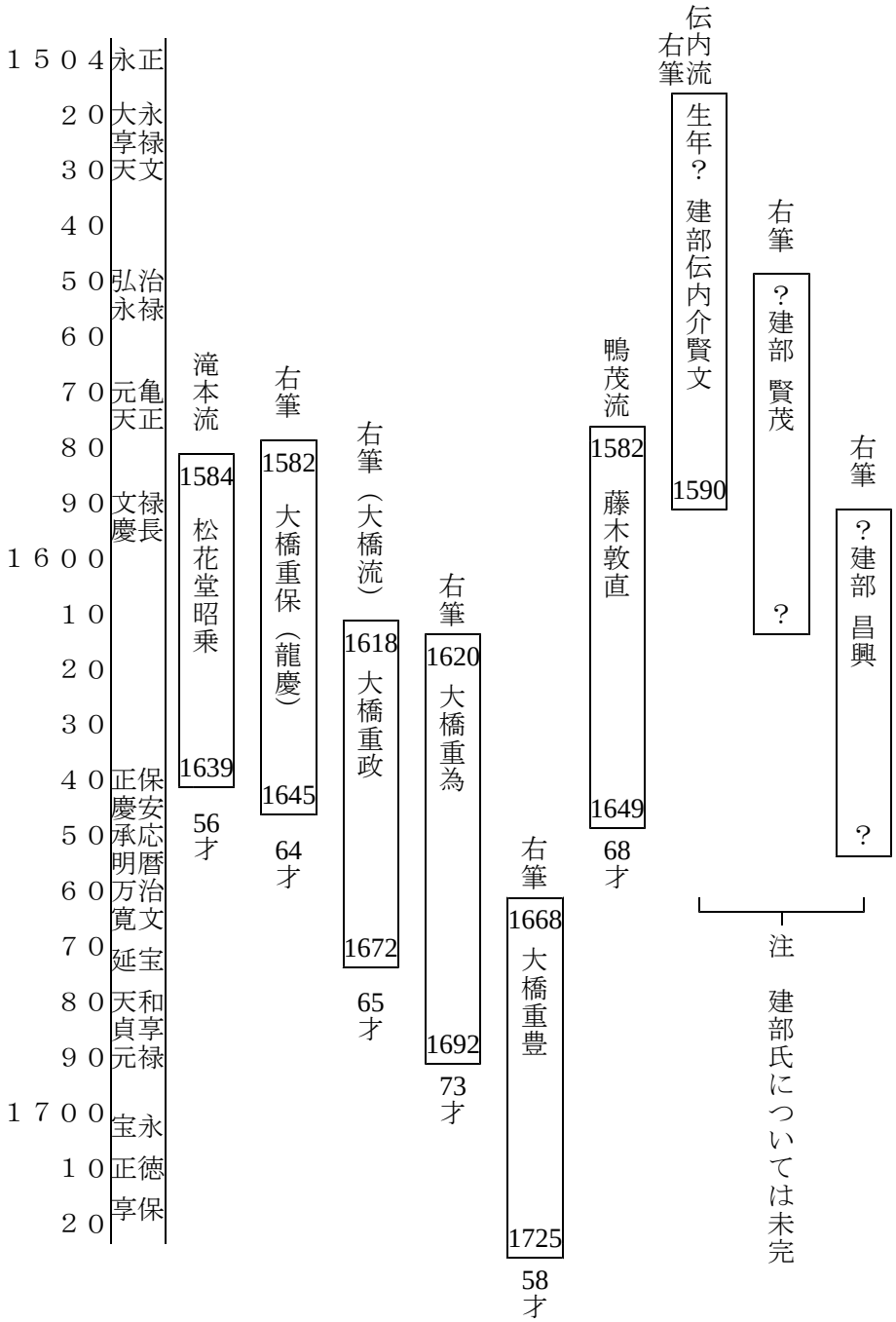
- 佐兵衛尉 重慶 弘治元生 天正30没12才
  - （右筆）長左衛門 重保（号龍慶） 天正10生 正保2没64才
    - （右筆）長左衛門 重政 元和4生 寛文12没55才
      - （小普請）重好 寛永17生才 享保3没79
        - （大番）重尚 寛文5生才 元文3没74
          - （大番）重章 元禄8生 宝暦8没64才
            - （大番）保孝 元文4生 宝暦10没
              - （大番）重保
                - 重泰 天明3没
                - 女
            - 次男 重保（長男保孝の養子となる）
      - 次男 白英（寿松院住職）
      - 三男 重尚（長男重好の養子となる）
      - 長女（高木氏に嫁す）
      - 次女（桜井氏に嫁す）
    - （右筆）次男、佐兵衛 重為 元和6生才 元禄5没73
      - 重豊 寛文8生 享保10没
        - 豊安
          - 茂休
            - 茂時
              - 豊成
                - 豊章

（60・1・5 伊藤節堂作図）

（文献）
藤沢市文化財調査報告書第三集
太田亮著姓氏家系大辞典
平凡社書道全集第二二巻

大橋流を中心とした書流年表

（伊藤節堂作図）



「 鵠　沼 」 昭和６０年１月号
通 巻 第 ２ ４ 号

昭和６０年１月８日発行
編 集 鵠 沼 を 語 る 会

藤沢市鵠沼海岸２－１０－３４
鵠 沼 公 民 館 内
電話３３－２００１、２００２